

# 新詩三篇

二、二、兩 桂

林

自由な奔放な氣分に蘇生つた。

二、墓場の煙の香

悲哀 怨恨

恐怖 落寞

尊き

人類の殘骸は化石の塔となり

なめらかなる膚は荒びたる苔となり

紅き血汐は泥にまみれ

悲調を帯びたる虫の音は

黄泉路の風情を帯び

緊張の餘韻は

月の光に消へ行く雲のごと

死人の靈を吊ふべく

老若男女は

東へ南へ

徑の花は

繁き人々の往來に戰慄ぬ。

一、童謠

童謠の幽かに響く

頑強な夕陽は

困憊の光をなげて

渾碧の球は

深い沈黙に遷つて往く

清澄な月の光は

寧ろ凄美の謳歌と歡喜に充ちてゐる

童謠の幽かに響く

雜駁な外殻から吐き出される

無意識の生の喜びと

美しい情調とが

自分の哀憐と

默想との心の弦に觸れてゐる、

童謠の尙も幽かに響く

長縮の牢獄に横臥してゐた

自分の心は

三、稚兒

乙女

君は稚兒の特權と幸福とに充ちてゐる  
君の自由な精神の美しさよ

その垂れたる黒髪は

愛と美の象徴なり

その雪白の腕には

眞紅の血が流れてゐる

その赤き口片は

君の頭を飾るリボンの如く

その細き咽喉から出る歌には

些少の虚偽もない

君は人類のうちで

一番の強者だ

そしてその全身は

眞善美の權化なり

吾は美しき君が手をとりて

漫歩しその折に  
吾が心の汚きに戦慄しぬ。

タリヤ

二三甲一

芳

郎

ひとときの偽と知れど  
放埒の懐しきまにまに  
こよひまた罪の酒のみ  
いかならば笑みて眠らむ  
じだらくの怪しき吐息の  
さめざめとやみにあるとき  
その白きまくらへのきぬ  
まんだらに涙しむべし  
あまぐものつひに雨となり  
あへかなる夜は死すとも  
わがまごのかたへによりて  
ちらんとするダリヤの花。